
1

ミシマユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1

【コード】

N0849BA

【作者名】

ミシマユキ

【あらすじ】

倉越ユキは才能に恵まれていたが……

↑高校に通う倉越ユキはクラスの誰よりも美しかった。それでいて自分の美貌を鼻にかけない謙虚さも持ち合わせていた。これは非常に賤の厳しい彼女の両親の教育によるところが大きい。

学業も優秀で、ユキは学内試験で主席の座を逃したことが過去に一度もなかった。これもまた彼女の家庭教師役を務める大学教授でもある父親の能力に関係していたが、彼女はそんな優秀な父親の話題をクラスメイトの前で決して自慢しなかった。お喋りのときも進んで友人たちの聞き役に徹してきたのである。

しかし恵まれた家庭環境をユキが誇りに思わなかったのかといえば、そうではない。

彼女は謙虚であることが美德であると信じていたし、自分の美貌や才能を無闇にクラスメイトにひけらかすようなことはその美德に反する行為だった……ただそれだけのことである。

そしてこんなユキの信条は、今日まで一抹の疑問が入り込む余地すら残さぬほどに揺るぎなかった。

ところで、謙虚というものには二種類あることをご存知か？

一つは己の身分の低さや才能の乏しさを隠すための見栄っ張りな謙虚であり、もう一つは己の有り余る技量の高さを隠すための自惚れな謙虚である。ユキの場合は確実に後者であった。

彼女がクラスメイトたちの前で優雅に振舞えたのも、彼女自身から彼らの誰よりも高い位置から物事を俯瞰できているという自信からくる自惚れの域を出ない。そしてそんな彼女の自惚れは……まる

で優雅に宙を舞う一匹の美しい蝶が、自分より遙か高くを飛び交う鳥たちの存在に気づいたときのような……そんな驚愕と共に破滅を迎える危険を常に予感させていた。

高校二年最後の期末テストで、ユキは初めて主席でなくなった。

朝彼女がいつものように登校し、いつものように下駄箱に揃えた靴をしまい、いつものように廊下に張り出された試験結果を見たとき、いつもの彼女の名前はいつもの位置になかった。このときの彼女の当惑した横顔はさぞ美しかったことだろう。

張り紙と睨めっこをしながら、薄い下唇をかみしめ悔しさに身を震わせるユキの姿に驚いた友人たちは、その日一日あえて試験の話題には触れず、ひねもす何事もない日常を演出することに努めた。まるで太陽のように君臨するのが当然だったユキの主席転落は、彼女たちの旺盛な好奇心を刺激しないわけではなかったが、彼女の親友たちの中に、影でこっそり笑い合うような裏切り者は出てこなかった。このような友人に恵まれたユキはまことに幸せ者である……彼女自身がそれをどう思ったのかはまた別の話であるが。

『あたしは人生で初めて一番を逃した。アレをこの目で見たときは流石にあたしも驚いた。驚いたけれど、でも、あたしが優秀なことに代わりはないわ。それなのに、彼女たちはどうしてあたしに試験の話をしてないんだろう？どうしてあえて話題を避けるのでしょうか？』

彼女の中に一度湧き出した疑問は、努めて冷静に対処すればしようとするほど、彼女の豊富すぎる知識と絡み合って増殖し、すぐに胸の中をいっぱいにした。彼女は抑えきれぬ不安を、教師が書いた黒板の文字をノートに書き写すことにぶつけて、なんとかごまかした。

『……感情的になってはイケナイ。今は頭の中を空っぽにして、』

先生の話に集中しなくちゃ。ただでさえ試験の結果が悪かったのだから。』

その日のノートは、いつにもまして綺麗に仕上がった。

これまでユキにとって、友情とは無意識で自然なものであった。しかし今では自然の状態から切り離され、考察と反省の対象になっ
てしまった。こうなるともう、二度と元に戻すことはできない。例
え時間を止め、また過去にタイムスリップし、主席転落をなかった
ことにしたとしても、ユキは考えることをやめないだろう。

『あの子たちはずるい。あたしが一番じゃなくて、誰もが驚いた
はずよ。それならあたしの肩をそつと叩いて、慰めてくれてもよ
かったじゃない。いいえ、いつそのことクラスメート全員の前で
私を思い切り笑い飛ばしてくれたなら……あたしを裏切ってくれた
なら、この惨めな気持ち、いくら救われたかもしれない。』

ユキは友人たちを疑うことを覚えた。もしかしたら影で笑われて
るのではないか？という疑問は一日中彼女を苦しめた。しかしこ
の疑心暗鬼の感情に溺れるほど彼女は愚かではなかった。友人た
ちからの買物やお泊り会のお誘いを断るかわりに、ユキは父親と
共に部屋にこもって勉強する時間が増えた。

しかし高校三年の春、最初の試験でユキが主席に返り咲くことはな
かった。

敗北を知らない少女にとって、突きつけられた現実はあまりにも残
酷だった。

親友の直子なおこが同級生の子供を妊娠して墮胎だたいした、という噂は全生徒の間に広がり、ユキの耳にも届いた。直子とは小学校からの付き合いである。事前に何の相談もなかったことに驚いたが、それ以上に彼女を動揺させたのは、相手の男性の名前である。

飯田治いいたあさむ……

ユキから二度も主席の座を奪いとった男の名前だった。彼女はなぜ直子が自分にだけ悩みを打ち明けなかったのかをすぐに理解した。そして笑った。放課後の人気のない教室で、声を立てずひっそりと。

ユキはその美貌と謙虚な態度から男子生徒たちの憧れの的であったが、それは彼女が処女であるという証明にはならない。彼女には以前にも二、三人の恋い慕う男性がいた。そしてこれら自分の恋人たちと飯田治を比べて、幼稚な優越感に浸ったとしても、それは別段彼女の罪ではない。

『かわいそうに、直子は騙されたのね。それにしても、マヌケな彼氏だこと。次の試験に影響がなければいいのだけれど。こんなことでやる気を無くされては、張り合いがないわ』

彼女は再び輝きを取り戻した。すらつと伸びた足は軽やかな足取りを取り戻し、彼女の瞳から爪の先までが自信に満ち溢れていた。

自己の内面的な葛藤に比べて、他人の不幸とはなんと気持ちのいいものか！

夏休みのある日、ユキが母親と共にK大学のキャンパスを見学に行ったその帰り道、一組の見知らぬ親子が声をかけてきた。四十

代ほどのスーツ姿の男性は、いかにもやり手のビジネスマンといった印象で、ユキの母親のT高時代のご学友らしい。

二人は突然の邂逅かいこうに胸をときめかせ、道端で学生時代の思い出に花を咲かせ始めたので、長くなりそうだし、彼女は母親を置いて先に家に帰ることにした。

「おいお前、倉越さんのお嬢さんを送って行ってやれ」

どうやら同じく長話に付き合わされるのは御免だったらしい息子は、父親の命令を潔く快諾するとユキの隣にたって歩き出した。初対面ということ、それからお互いの年齢を考えれば、二人がしばらくの沈黙に気まずい思いをしたのも無理のないことだろう。その沈黙を破ったのは珍しくユキの方だった。

「あなたのお父さん、ビジネスマンって感じで素敵ね」

「そうかい？世の中の大抵の父親はサラリーマンだと思うが……あ、そうか。キミのお父さんは大学の教授だったね。それもK大学の」「え、あたしのことをご存知なの？」

「当たり前じゃないか。T高校の生徒でキミのことを知らない男はいないよ」

青年は冗談交じりの笑みを口元に浮かべて、大げさに肩をすくめてみせた。

「それにしても、きみって本当に、自分以外のことに興味がないんだな」

「それってどういう意味……？」

「僕が、飯田治なんだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0849ba/>

1

2012年1月2日21時47分発行